

研究論文

「知的障害がある子どもを育てる母親の子育て エンパワメント質問票」の信頼性・妥当性の検討

兵庫医療大学リハビリテーション学部作業療法学科

有吉 正則

目白大学大学院リハビリテーション学研究科

(前所属;首都大学東京大学院人間健康科学研究科)山田 孝

キーワード : エンパワメント, ヘルスプロモーション,
尺度開発, 知的障害, 子育て支援

要旨 : 本研究の目的は, 知的障害がある子どもを育てる母親の子育てエンパワメント(子育てに関わる内なる力の回復)を測定する尺度の開発である. 183名の母親を分析対象にし, 理論的に設定した16下位尺度を構成する35質問項目の信頼性・妥当性を検討した. 回答の偏り, Cronbachの α 係数, 因子分析の結果に基づき, 最終的に16質問項目を採用し, 4下位尺度となった. 再構成された尺度は $\alpha = 0.71$ ($0.65 \sim 0.89$)であり, 十分な内的整合性が認められた. また, 因子分析により4因子が抽出され, 各下位尺度を構成する質問項目は, 同一因子に対して0.40以上の因子負荷量を有しており, 尺度は構成概念妥当性を確保していると判断された.

研究の背景と目的

子育てに自信をなくした親が子育て上の心理的危機を乗り越えて親としての自信を取り戻すこと、いわゆる子育てエンパワメント（子育てに関わる内なる力の回復）を支援するためには何が必要であろうか。エンパワメントとは、何らかの状況や抑圧によって自己の可能性が押し込められてしまっている人たちが、共感、信頼、連帯、権利意識といった肯定的パワーによって自己の内なる力の存在に気づき、自らのコントロールを取り戻すプロセスととらえることができる¹⁾。さらに、エンパワメントは外部からの働きかけのみで起こりうるものではなく、「自己決定」、「潜在力への気づき」、「効力感」などがあってはじめて起きる、極めて心理的な側面の強いプロセスであると考えられている²⁾。このような子どもを育てる親の内的変容観点より、近年、親になってからの変化・発達（以下、親の発達）を分析した研究がみられつつある^{3)~7)}。我が国における知的障害がある子どもを育てる親の発達に関する研究は、研究の数自体が少なく、関連要因の検討を行った研究はさらに少ない。また、それらの研究は、健常児の親を調査対象として作成された尺度を用いて分析が行われており、知的障害がある子どもの親に特化した心理尺度を用いた研究は十分なされていない⁸⁾。この問題を解決するためには、知的障害がある子どもの親に特化した心理尺度を用いた「子育てエンパワメントに関する状態」を明らかにする質問票（以下、質問票）の開発が強く望まれる。

ところで、筆者らは、これまでに知的障害がある子どもを育てる母親の子育てエンパワメントを測定する質問票の開発を目指して、尺度原案を作成し検討を行ってきた^{9,10)}。第一の先行研究⁹⁾では、乳児期から就学後までの子育てエンパワメントのプロセスを明らかにすることを目的に、知的障害が

ある子どもの母親 10 名より就学後までの子育ての出来事を聞き取り，語りの内容を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ¹¹⁾に準じて分析した．その結果，母親が子育てへの自信を回復するうえで重要となる要因として「母親役割の変遷」，「子育て方針の変化」，「育児期における母親間の関係」，「夫婦関係」の 4 大カテゴリーに分類される 16 の小概念（表 1）を生成するとともに，時系列に沿って概念が変遷するプロセスを提示した．この理論的に設定した子育てエンパワメントに関連する 16 の小概念こそ，知的障害がある子どもの親を調査対象として心理尺度の信頼性，妥当性の検証を行い得る下位尺度（以下，理論的下位尺度）のベースになるものと考えた．

第二の先行研究¹⁰⁾では，母親自記式の質問票作成のため 16 の理論的下位尺度に対応する 51 項目からなる質問項目「母親役割の変遷」19 項目，「子育て方針の変化」10 項目，「育児期における母親間の関係」9 項目，「夫婦関係」13 項目を作成した．次に，51 項目に対する表面妥当性について作業療法士 9 名と知的障害がある子どもを育てる母親 8 名の 2 群による検討を行った．内容妥当性については，早期療育の専門家 14 名に，質問項目が理論的に規定した下位尺度と一致しているかどうかについて，Delphi process^{12, 13)}に準拠した検討を依頼した．その結果，最終的に 35 項目が「同意」のコンセンサスを得たと判断され，構成概念妥当性を検討するための質問項目が作成され，質問票開発の可能性が見出された．

本研究では，知的障害がある子どもを育てる母親の子育てエンパワメントに対する信頼性と妥当性のある測定尺度の作成を目的とした．具体的には，35 項目からなる母親自記式の質問票（表 1）の構成概念妥当性を検討することである．

なお，本研究は，首都大学東京健康福祉学部研究安全倫理委員会の承認（受理番号 07020）を得て実施された．

研究方法

1. 対象

首都圏および大阪府下に在住する 12 歳以下の療育手帳を交付されている障害児のうち、知的障害児通園施設を利用している 6 歳以下の幼児（以下、幼児群）と特別支援学校（知的障害養護学校）に在籍する 12 歳以下の児童（以下、学童児群）をもつ母親の計 419 人である。

2. データの収集方法

調査協力機関の施設長と校長を通じ調査を実施した。調査は無記名、自記入形式であり、返送は郵送とした。テスト・再テスト法実施の準備として質問票にコード番号をつけ、調査協力機関のスタッフが同じコード番号の質問票を調査対象者に再配布可能なようにした。回答は、子育ての状況をあげた 35 の項目文に対して、あなたの今の状況と「どのくらい一致していると思うか」という認識を「全くあてはまらない」から「よく当てはまる」の 5 段階スケールによって自己評価する形式とした。

3. データ分析方法

質問票の信頼性については、安定性と内部一貫性の検討を行った。安定性については、質問票が返送された知的障害児通園施設利用者 58 名を対象に、1 回目と 2 回目のテストの間隔を 5 週間としテスト・再テスト法を行った。内部一貫性については、級内相関係数から検証した。

質問票の妥当性については、構成概念妥当性を検討した。探索的因子分析を行い、理論的下位尺度と因子分析により得られた因子構造を比較した。

データ処理は、統計解析ソフト SPSS 17.0J for Windows を用い、相関は危険率 5 % 未満を有意とした。

結 果

1. 対象者の人数

調査は 2008 年 8～9 月にかけて実施され、419 名中 212 名から返送（回答率 50.6%）があり、うち 183 名の有効回答（有効回答率 43.4%）が得られた。テスト・再テスト法は 2008 年 9～10 月にかけて実施され、58 名中 39 名から有効回答（有効回答率 67.2%）が得られた。対象者の概要は表 2 に示す。

2. 尺度項目の安定性について

尺度の安定性について、テスト・再テストの信頼性の指標として級内相関係数（intraclass correlation coefficients；以下，I C C）を算出した。その結果，本尺度全体で I C C = 0.94 であった。内部一貫性について，Cronbach の α 係数を算出したところ，本尺度全体では $\alpha = 0.71$ であった。

3. 尺度の項目分析について

35 項目の項目ごとの選択肢は、「全く当てはまらない」を 1 点，「少し当てはまらない」を 2 点，「どちらでもない」を 3 点，「少し当てはまる」を 4 点，「よく当てはまる」を 5 点とするリッカート尺度である。まず，各項目の反応分布について，項目の平均値と標準偏差を加算した値が評定の満点（5 点）を超えていた 6 項目（質問：04，13，18，20，26，35）を天井効果により弁別能力が不足する項目と判断し削除した。ただし，同じく天井効果が認められた項目ではあるが「家族

との関係」に関わる 3 項目（質問：03, 06, 25）は，家族と子どもの発達の関連要因として報告した先行研究^{14,15)}がみられることより，本尺度にとって重要な意味をもつものであると解釈し採択した．その後，幼児群と学童児群において，質問項目の反応分布に有意な差 ($p < 0.01$) がみられた 3 項目（質問：05, 22, 29）を削除した．

次に因子分析（重みなし最小二乗法，プロマックス回転）を行った．因子負荷量の低い項目はその意味を考慮しつつ検討し，0.40 以下の項目を削除した．固有値の変動状況を考慮し，2 因子～9 因子解まで求め，解釈可能性を考慮して固有値が 1.00 以上を示した 4 因子解を採択した（表 3）．抽出された 4 因子の固有値は 15.72 で，分散寄与率は 60.5% であった．第 I 因子は 6 項目（質問：02, 06, 12, 16, 21, 27），第 II 因子は 5 項目（質問：07, 09, 17, 19, 24），第 III 因子は 3 項目（質問：15, 31, 32），第 IV 因子は 2 項目（質問：11, 33）が抽出され，第 I 因子と第 II 因子間に相関が確認された（表 3）．各因子の内的整合性（Cronbach の α 係数）は，全体（第 I ～第 IV 因子からなる 16 項目）では $\alpha = 0.71$ であり，各下位尺度においては $\alpha = 0.65 \sim 0.89$ の範囲であった．

考 察

1. 尺度項目の安定性について

テスト・再テスト信頼性係数（I C C）の結果は，尺度全体で I C C = 0.94 であった．級内相関係数は通常 0.70 以上あるのが要求されることから，本尺度項目は安定して母親の子育てエンパワメントに関する状態を測定できる質問票であると考えられた．

探索的因子分析から抽出された 4 因子構造の内部一貫性は，本尺度全体では $\alpha = 0.71$ であった．通常 α 係数は，性格や態

度などの心理検査を測ろうとする場合、おおむね 0.70 以上あることが望まれる¹⁶⁾。よって、4 因子構造はかなり内部一貫性の高い項目で構成されていることがうかがえる。また、下位尺度別では、第Ⅳ因子は $\alpha = 0.65$ とやや低い、先行研究^{17, 18)} では信頼性係数を 0.60 以上あることとしたものもみられることより、おおむね等質な項目を含んでいると考えられる。

2. 構成概念妥当性について

因子分析によって抽出した 4 因子構造は、ベースである 4 大カテゴリ構造からの大きな逸脱はなく、11 の理論的下位尺度に対応する 16 の尺度項目はその関係性をおおむね保持していた（表 4）。

4 因子の下位尺度の特徴を吟味した結果、第Ⅰ因子を「不安な心を支えてくれる人々」、第Ⅱ因子を「ポジティブ思考に裏打ちされた子育て技能」、第Ⅲ因子を「母親失格という否定的感情からの脱却」、第Ⅳ因子を「育児感覚に関する夫とのギャップの解消」と名づけた。

第Ⅰ因子「不安な心を支えてくれる人々」については、母親を支えてくれる人的環境^{4, 6, 14, 19)}と互いに助け合いながら親として学ぶ、社会的相互作用による学び²⁰⁾に関連する項目が含まれている。周りの人々からの励ましや母親への理解を示す共感的サポートは、障害児を育てる親の発達に関連要因であることから、第Ⅰ因子に関わる人的環境の整備は母親の子育てエンパワメントの推進力になり得ると考えられた。

第Ⅱ因子「ポジティブ思考に裏打ちされた子育て技能」については、子どもの個別性を重要視し、試行錯誤を重ねながら育児に対する積極性と寛容さをあわせ持つに至る母親の心の機微に関連する項目が含まれている。管野²¹⁾は、母親の気持ちにポジティブな変化をもたらすものとして、母親の期

待する行動と実際に子どもがとる行動とのズレを契機とした自らの育児についての見直しを挙げている。このとき第三者に子どもの肯定的側面を指摘してもらうことによって、母親は子どものもつ一面を認識し、肯定的感情が引き出されるといわれている²²⁾。このことから、第Ⅱ因子は、子育てに対する母親の思考が第三者的な視点を取り入れた見直し行為を通じてポジティブ思考に転じる過程が反映された項目であると考えられた。

第Ⅲ因子「母親失格という否定的感情からの脱却」については、親として不適格ではないかとの失路の思いと夫婦のコミュニケーションのあり方に関連する項目が含まれている。夫婦間の会話頻度が高いほど母親の育児不安は軽減されるが¹⁵⁾、夫婦間のコミュニケーション態度が共感的（夫への理解・支持と妻への理解・支持）、かつ衡平的になされていないと、母親の育児や家事に対する否定的感情は強まることが明らかにされている²³⁾。第Ⅲ因子は、母親の心理的安定は夫婦間のコミュニケーションの頻度と態度により調整されるという夫婦関係の特性が反映されている項目と考えられた。

第Ⅳ因子「育児感覚に関する夫とのギャップの解消」については、夫婦に付与された役割を夫婦双方が共通理解に努め、役割期待に応えるように遂行する、共感的役割遂行^{24, 25)}に関連する項目が含まれている。加藤ら¹⁵⁾は、父親の育児関わりが子どもの社会性の発達に直接的な影響を与え、夫婦の会話頻度が高いほど父親の育児関わりが増えることを明らかにした。現状において父親の育児関わりは長時間労働を理由に総じて少ない²⁶⁾。第Ⅳ因子は、家族と子どもの発達に関連する夫婦役割の遂行実態を反映する項目であり、きっかけがなければ表面化せずに問題視されにくいといわれている²⁷⁾夫婦関係の問題をアセスメントする視点となり得る可能性を示唆するものと考えられた。

3. 子育てエンパワメント尺度の有用性

研究の結果は、母親を支えてくれる人々との間で営まれる社会的相互作用を反映した心理尺度の抽出を示唆している。熊倉ら⁴⁾は、知的障害児を育てる母親の自己成長感の関連要因として周りの人々に支えられているという母親の認識を見出した。この認識には、障害児の母親にとって育児の中で生じる感情をポジティブに向かわせる影響があると考察している。本尺度は、このような社会的相互作用を背景とする子育てエンパワメントのプロセスについてのアセスメントを可能とし、育児の中で生じる感情がネガティブ思考のまま留まっている母親のスクリーニングやその支援の介入点を判断する指標となり得る可能性をもつ尺度であると考えられる。

まとめと今後の課題

本研究では、183名の母親を分析対象にし、理論的に設定した16下位尺度を構成する35質問項目の構成概念妥当性の確認を行った。開発した測定尺度は、16項目4下位尺度で構成された。下位尺度は、「不安な心を支えてくれる人々」、「ポジティブ思考に裏打ちされた子育て技能」、「母親失格という否定的感情からの脱却」、「育児感覚に関する夫とのギャップの解消」の4つとなった。内的整合性による信頼性については、尺度全体と他の下位尺度の内的整合性を確保している。また、因子分析の結果、構成概念妥当性が確保されていることが確認された。今後は特に項目数が少なかった第Ⅲ因子「母親失格という否定的感情からの脱却」、第Ⅳ因子「育児感覚に関する夫とのギャップの解消」の項目を補強し、下位尺度の信頼性を高めることが課題である。また、質問票の信頼性を高めた上で、調査を重ねていくことによって、各下位尺度

得点の標準範囲を明らかにすることが重要であり，尺度のスクリーニング機能の検討を今後の課題とする．

謝 辞：本研究の調査にご協力を頂いた関係者の皆様に心より御礼申し上げます．

文 献

- 1) 中村和彦：エンパワメントの概念およびエンパワメント・ファシリテーションの検討．Human Relations3：1-19，2004．
- 2) 久保田純：エンパワメントとは何か．現代のエスプリ 276：10-34，1998．
- 3) 橋本真知子，佐久間宏：障害児を持つ母親の自己成長に関する研究－母親へのアンケート調査を通して－．宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要 27：323-332，2004．
- 4) 熊倉朋子，谷村厚子，三浦 咲：知的障害児の母親における育児負担感と自己成長について－ソーシャルサポートとの関係から－．明治学院大学文学研究科心理学専攻紀要 5：1-15，2000．
- 5) 松本元子：障害児の母親の自己成長感とアイデンティティに関する研究．リハビリテーション心理学研究 33(1)：29-40，2006．
- 6) 橋本真規，工藤麻由，奥住秀之，津川律子：障がい児を育てる親の発達とソーシャルサポートとの関連．東京学芸大学紀要総合教育科学系 58：289-294，2007．
- 7) 橋本真規，奥住秀之，熊野正之：障がい児を育てる母親の「自己成長感」尺度の作成と信頼性・妥当性の検証．発達障害研究 32(5)：458-467，2010．

- 8) 橋本真規, 奥住秀之: 障がい児を育てる親の発達に関する文献検討. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 59: 243-253, 2008.
- 9) 有吉正則, 山田 孝: 療育支援活動における地域作業療法のあり方に関する研究－知的障害児を育てる母親の役割形成と変遷のプロセスについて－. 日本保健科学学会誌 7(4): 285-294, 2005.
- 10) 有吉正則, 山田 孝: 知的障害児を育てる母親の子育てエンパワメント質問票の妥当性の研究. 作業療法 28: 525-535, 2009.
- 11) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチ－質的実証研究の再生－. 弘文堂, 東京, 1999, pp.7-272.
- 12) Catherine P. Nicholas M (大滝純司・監訳): 質的研究実践ガイド. 医学書院, 東京, 2001, pp.44-52.
- 13) Stanford R. Brian M. Fong C: Research directions related to rehabilitation Practice－A delphi study－. Journal of Rehabilitation 64: 19-26, 1999.
- 14) 加藤道代: 育児初期の母親の養育意識・行動とサポート資源. 国立婦人教育会館研究紀要 3: 53-59, 1999.
- 15) 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カツコ, 土谷みち子: 父親の育児かかわり及び母親の育児不安が3歳児の社会性に及ぼす影響－社会的背景の異なる2つのコホート比較から－. 発達心理学研究 13: 30-41, 2002.
- 16) 鎌原雅彦, 宮下一博, 大野木裕明, 中澤順: 心理学マニュアル質問紙法. 北大路書房, 京都, 1998, p104.
- 17) 陳 東, 森 恵美, 望月良美, 柏原英子, 安藤みか, 他: 乳幼児を持つ親に対する子育て観尺度の開発－信頼性・妥当性の検討－. 千葉看護誌 12(2): 76-82, 2006.
- 18) Polit DF. Hungler BP (近藤潤子・監訳): 看護研究－原理と方法－. 医学書院, 東京, 1996, pp.246.

- 19) 高田 薫：共同問題解決過程としての子育て－他者に頼ることで生じる人との付き合い－．立命館人間科学研究 7：35-45，2004．
- 20) Rogoff B：Cognition as a collaborative process．In Damon W(ed) ,Handbook of child psychology, vol. 2, John Wiley & Sons Inc, New Jersey, 1998．
- 21) 菅野幸恵：母親が子どもをイヤになること－育児における不快感情とそれに対する説明づけ－．発達心理学研究 12(1)：12-23，2001．
- 22) 岩崎久志，海蔵寺陽子：軽度発達障害をもつ母親への支援．流通科学大学論文集－人間・社会・自然編－22(1)：43-53，2009．
- 23) 平山順子，柏木恵子：中年期夫婦のコミュニケーション態度－夫と妻は異なるのか？－．発達心理学研究 12：216-227，2001．
- 24) 高木 修，森山 愛：第2章 夫婦関係の維持・安定化を規定する要因の研究－共感的役割遂行とその夫婦間衡平性に着目して－．調査と資料（第107号），関西大学経済・政治研究所，大阪，2010，pp37-57．
- 25) 青木典子，池添志乃，瓜生浩子，大川宜容，岡本幸江，他：6章Ⅲ家族宅割についての考え方．家族エンパワメントがもたらす看護実践，野嶋佐由美・監修，中野綾美・編集，へるす出版，東京，2005，pp.100-103．
- 26) 厚生労働省：平成23年版厚生労働白書．厚生労働省，東京，2011，pp.184-191．
- 27) 藤原里佐：重度障害児の家族の生活－ケアする母親とジェンダー－，明石書店，東京，2006，pp.162-169．

表1 理論的下位尺度を構成する質問項目

理論的下位尺度		質問項目	
母親役割の変遷カテゴリー	概念01 母親失格という否定的感情	質問15 質問31	子どもと一緒に過ごす不安になる 子どもが喜ぶことがわからない
	概念02 子どもにとって欠くことのできない存在であろうとする思い	質問29 質問34	子育ての悩みは療育スタッフに聞く 療育施設で学んだことへの自信
	概念03 子育て環境の見直しを図る決意	質問18 質問20 質問22	生活へ活かせる相談機関の助言が欲しい 就学に関する本や話を聞くようにしている 助言してくれる相談機関がなくて困る
	概念04 社会的存在としての成長を遂げたいという思い	質問02 質問08 質問14 質問28	地域のひととの関わりは不安を軽くする 近隣のお友達と遊ぶために子育てサークルに参加 校区の人と知り合う目的でPTAに参加 地域のお友達の育ちも楽しめる自分になりたい
	概念05 子どもの権利の代弁者	質問26	教室での様子を聞く工夫をしている
子育て方針の変化カテゴリー	概念06 母性行動と社会規範を尊重した子育て	質問13	発達の遅れを解決してくれる養育法を知りたい
	概念07 生活技能の習得を願う母親の切なる思い	質問07 質問09 質問19	食べこぼしの量を目安に食器を選んでいる 家で身辺処理を教える際には口調に注意している トイレ訓練は成長に合わせて指導法を変えている
	概念08 子どもの視点へ歩み寄ろうとする母親の模索と葛藤	質問05 質問17	友達と遊ぶ姿をみてから発達の遅れを気にしなくなった 子どもにべったりから卒業するための工夫
	概念09 子どもの行動に振りまわされない環境作り	質問24	子どもに八あたりをしないような工夫
育児期における母親間の関係カテゴリー	概念10 育児不安を和らげる子育て仲間との共感体験	質問06 質問12 質問21	実家の母や友人が心の支えになっている 助けてって言える友人がいる 悩みを打ちあけられる友人がいる
	概念11 互いに学びあい支えあうという気持ち	質問10 質問16 質問23	母親同士で子どもを預かりあう 母親同士で食事に行くストレスがへる 母親が集まれが勉強会が開け、人の輪が広がる
	概念12 参加・実践を通して紡がれる人の輪	質問27 質問35	周りの人のことも考えるようになった 子供が学校に慣れたら仕事につきたい
夫婦関係カテゴリー	概念13 育児感覚のギャップに対する孤独感	質問33	夫は育てにくさがピントこない
	概念14 愛情証明としての家事とその原動力となる達成感	質問01 質問04 質問30	育児中心でも意味のある時間の使い方だと思う 私的時間を削っても家事や育児をはたすことは当然 夫婦間の役割は分担されている
	概念15 育児の責任負担感を和らげる夫婦のコミュニケーション	質問03 質問25 質問32	夫婦で話をして互いに労わることが大切 夫からの感謝の言葉はがんばりの素 家族のためには苦劳はいとわない
	概念16 育児責任の再調整に対する決意	質問11	夫は子どもへの接し方がわからないのだと気づいた

表 2 分析対象者の内訳

		10代	20代	30代	40代	50代	合計（名）
母親の年齢		1	5	92	81	4	183
地域	首都圏	0	0	19	25	3	47
	大阪府	1	5	73	56	1	136
子どもの年齢群	幼児群	1	3	39	15	0	58
	学童児群	0	2	53	66	4	125
兄弟の有無	兄弟 有	0	4	61	61	2	128
	兄弟 無	1	1	31	20	2	55

母子家庭、および療育サービスを利用した経験のない者は分析対象者に含まない

表3 本尺度の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

因子名・理論的下位尺度を構成する質問項目		因子負荷量				α 係数
		I	II	III	IV	
第 I 因子：不安な心を支えてくれる人々						
概念10（質問12）	助けてって言える友人がいる	0.82	-0.21	-0.01	0.04	0.76
概念10（質問06）	実家の母や友人が心の支えになっている	0.59	-0.37	-0.12	0.06	
概念12（質問27）	周りの人のことも考えるようになった	0.56	0.08	0.05	0.07	
概念11（質問16）	母親同士で食事に行くとストレスがへる	0.55	-0.09	0.22	0.14	
概念04（質問02）	地域の人との関わりは不安を軽くする	0.53	0.20	0.00	0.16	
概念10（質問21）	悩みを打ちあけられる友人がいる	0.50	-0.01	-0.14	-0.19	
第 II 因子：ポジティブ思考に裏打ちされた子育て技能						
概念07（質問07）	食べこぼしの量を目安に食器を選んでいる	-0.20	0.75	-0.09	0.09	0.72
概念08（質問17）	子どもにべったりから卒業するための工夫	-0.06	0.64	0.00	0.01	
概念07（質問19）	トイレ訓練は成長に合わせて指導法を変えている	-0.18	0.48	-0.03	-0.10	
概念07（質問09）	家で身辺処理を教える際には口調に注意している	-0.06	0.43	0.20	0.17	
概念09（質問24）	子どもにやつあたりをしないような工夫	-0.02	0.42	0.00	-0.08	
第 III 因子：母親失格という否定的感情からの脱却						
概念01（質問15）	子どもと一緒に過ごす不安になる	0.20	-0.03	-0.75	0.07	0.89
概念15（質問32）	家族のためには苦勞はいとわない	-0.02	0.29	0.42	0.07	
概念01（質問31）	子どもが喜ぶことがわからない	-0.03	0.24	-0.40	0.20	
第 IV 因子：育児感覚に関する夫とのギャップの解消						
概念13（質問33）	夫は育てにくさがピンとこない	0.01	-0.06	0.05	0.68	0.65
概念16（質問11）	夫は子どもへの接し方がわからないのだと気づいた	0.09	0.17	-0.02	0.61	
因子間相関						
	第 I 因子	—	0.52	-0.13	-0.10	尺度全体の α 係数
	第 II 因子	0.52	—	-0.03	-0.01	
	第 III 因子	-0.13	-0.03	—	0.10	
	第 IV 因子	-0.10	-0.01	0.10	—	
固有値		7.14	4.63	2.51	1.43	15.72
分散寄与率（%）		27.5	17.8	9.7	5.5	60.5

網かけは因子負荷量0.4以上を示した質問項目で、α 係数の算出に用いた

n=183

表4 因子構造に対応する理論的下位尺度

因子	項目	理論的下位尺度	
第Ⅰ因子：不安な心を支えてくれる人々	質問02 地域の人との関わりは不安を軽くする	概念04 社会的存在としての成長を遂げたいという思い	母親役割の変遷カテゴリー
	質問06 実家の母や友人が心の支えになっている	概念10 育児不安を和らげる子育て仲間との共感体験	育児期における母親間の関係カテゴリー
	質問12 助けてって言える友人がいる		
	質問21 悩みを打ち明けられる友人がいる		
	質問16 母親同士で食事に行くとストレスがへる	概念11 互いに学びあい支えあうという気持ち	
質問27 周りの人のことも考えるようになった	概念12 参加・実践を通して紡がれる人の輪		
第Ⅱ因子：ポジティブ思考に裏打ちされた子育て技能	質問07 食べこぼしの量を目安に食器を選んでいる	概念07 生活技能の習得を願う母親の切なる思い	子育て方針の変化カテゴリー
	質問09 家で身辺処理を教える際には口調に注意している		
	質問19 トイレ訓練は成長に合わせて指導法を変えている	概念08 子どもの視点へ歩み寄ろうとする母親の模索と葛藤	
	質問17 子どもにべったりから卒業するための工夫	概念09 子どもの行動に振りまわされない環境作り	
第Ⅲ因子：母親失格という否定的感情からの脱却	質問15 子どもと一緒に過ごす不安になる	概念01 母親失格という否定的感情	母親役割の変遷カテゴリー
	質問31 子どもが喜ぶことがわからない	概念15 育児の責任負担感を和らげる夫婦のコミュニケーション	夫婦関係カテゴリー
質問32 家族のためには苦勞はいとわない			
第Ⅳ因子：育児感覚に関する夫とのギャップの解消	質問33 夫は育てにくさがピントこない	概念13 育児感覚のギャップに対する孤独感	夫婦関係カテゴリー
	質問11 夫は子どもへの接し方がわからないのだと気づいた	概念16 育児責任の再調整に対する決意	

A Study of the Reliability and adequacy for “Questionnaire on the empowerment of Parental care of mothers who have a child with intellectual disability”..

By

Masanori Ariyoshi, MSOT, OTR^{*1} Takashi Yamada, PhD, OTR^{*2}

From

^{*1}Hyogo University of Health Sciences

^{*2}Graduate School of Rehabilitation, Mejiro University

(Former affiliation ; Graduate School of Human Health Science, Tokyo Metropolitan University)

This research aims to develop a scale to the measurement of empowerment (inner force recovery related to parental care) of mothers who raise a children with mental retardation. 183 mothers were surveyed, and the reliability and adequacy of 35 question items consisting of 16 theoretically-set subscales were studied. Based on the results of response bias, Cronbach's α factor and factor analyses, 16 items consisting of 4 subscales were conclusively adopted. Sufficient inner compliance was confirmed with the α for the re-constructed criteria being 0.71(0.65-0.89). For factor analysis, four factors were selected. Question items that constitute each subscale have more than 0.40 factor loading for the same factor, therefore the adequacy of this criteria is now ensured.

Key words : Empowerment, Health promotion, Development of scale,
Mentally handicapped child, Mother guidance